

---

# 拝啓、日だまりの人々

あおぞらスカッツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

拝啓、日だまりの人々

### 【Nコード】

N4773A

### 【作者名】

あおぞらスカッツ

### 【あらすじ】

ある日、小さなアパートに住む「私」が隣に住みながらなんでも屋を営む男のドアを開くと、そこには一人の女がいた。そこから二度と来ない静かな一日が始まる……

## ブローグ

手先を雨戸にかけると、手先の感覚が冷えた空気に染み込んでいくようにして失くなった。

やはり厚い板の先にはほの暗い街が広がっていた。まだ埃、もたつていない、風が吹き込んでこなければ人はまだ屋外に出ようとしな。きつと隣部屋に住んでいる男はそうなんだろう？ 全く、朝から何やっているの、まだ今は四時ちよつと過ぎよ、そりや壁に耳を当てれば毎回何かしらおかしな音は聞こえるけれど。まあもう少ししたら隣部屋のベルを鳴らしましょう。もっとも、小綺麗な物じゃなくて、固い紐を左右に触れば上に吊されたバケツが音を出す、小汚いベルなんだけれど。

隣部屋に住んでいる男と私は妙な関係で結ばれている、そう言ったのは男の兄であつた。この兄というのがまた妙な男であつて、今は作家をしながら、時々地方の新聞紙に小さなコラムを書いている。私は一度だけそのコラムを見させてもらったのだが、これがまたおかしい。覚えてしている限りでは、あの番組がわかるようになれば君はもう一人前の大人だとか、君はあの伝説の技を覚えているかとか、やはり作家なだけあつて一般人にはわかりにくい内容であつた。そんなことを考えている間に窓辺に漂う空気は変わっていた。さっきまでとは違う、人肌になじんでいく。はあ、少し首を動かせば、ほら、人も鳩もいる。それじゃあ私も、バケツを鳴らしに行きましよう。

## 一人の女

慣れた足付きでサンダルを履く。

いつもこんな調子だ。

彼の部屋にはよく自分の跡を付けている。

別に私と彼との間に深い関係はない。

勝手に上がり込んで、そこら辺に置かれている新聞を開きながら持参したそら豆をつまむ。

友達？違う、そんなんじゃない。

もっと馬鹿らしいもの。

もう一つの薄汚れたドアの前に立つ。

この貧相な景色の中で足りないものがある。もし、恋人同士になりたいのであれば、友人同士になりたいのであれば、私はバケツを鳴らした。ぶっきらぼうな声が耳をかすめる。必要ないだろう？ああ、本当にその通りなんだ。つまらないほど、欲しがらない。

だが、いくら待っても返事はなかった。

私はいつものようにドアノブを握った。

男の横には一人の女性がいた。歳は二、三歳上ぐらいで、余り変わりはない。栗色の髪は胸の辺りまであり、顔の中央に伸びるすらつとした鼻、上品な二重、睫毛が動く度、その下には髪と同じ色の瞳が潤む。

だって、ほら、私もあの男も大学生なんだから、もういい歳じゃない、こんな人がいたっていいのよ。朝、自分が何の音で起きたと思う？物が壁に当たるけたたましい音。時々聞こえる、誰かを怒るような、男の怒号。まあ、その相手がまさか女なんて思いもしなかったけど。

しかし、私は知らずのうちにおかしな身構えをしていた。私以外でこの部屋に上がった女は今、目に見える、栗色の髪の彼女だけなんだ。そういえば、

こめかみにくすぐつたい、しかし熱い体温を持つ記憶がほとぼしる。そういえば男には地元に置いてきた彼女がいたはずだ。あの彼女も彼女で、部屋で寝っ転がる私に対して言った最初の言葉が

「話は聞いています。これからこの人をよろしくお願いします」

そうしてそのまま、男にお弁当がはいったスーパーの袋を渡すとさつさと帰っていった。少し幼さが残る顔だったが、人形のような大きな黒い瞳は今でも印象に残っている。さっぱりとした声から分かるように、彼女は私に対して嫉妬心をもたなかった。男とも何も話さずに去っていった。それで関係が果たして続くのだろうか。

いや、続くのかも知れない。

今、何年生？もう、三年生。

少なくともそれだけの間付き合っているんだ。

二人は堅い何かで包まれているようで、私のような人物の声さえも無視をする。そんな出来事をずっと記憶していたのに。だって、あんな重いものをどうするの？

いや、なんでもいいの。彼がどうなろうが。

男と私の間にはそんな互いを心配するような関係なんてない。妙な関係、同じ大学なだけ、古いアパートの住人隣同士、遅刻しそうなとき車に乗せてってくれる、そう、そんな馬鹿らしい関係。

「この人、は？」

「今日の相方。大丈夫、食べたりしないから」

この男、私は怒鳴ってやろうとした、だが、私はこの男の名前を知らないんだ。

## 私の思い

あの場面、古ぼけたドア、ベル代わりのバケツ。  
足りないもの、正解は標札。

彼は私が引つ越してくる頃にはすでにここにいた。

ちょうど三年前、この時期。

日数を追うごとに日差しが明るくなり、まだ昨日のこのようにと  
手のかじかんだ感覚を思い出しながら、部屋の中で一匹の虫を見つ  
けた。その虫はろうそくの火のように安定しない体をふらふらさせ、  
私の持つてきた灰色のバツクの上をひたすら回っていた。

天井はうつすらと茶渋の色のしみの影があつて、白い壁紙には画鋏  
の跡が三、四個残っていた。

部屋には私、バツク、虫しかないけれど、もう少し、あと少しし  
たら、ここは大量の段ボール箱で埋め尽くされる。そうしたら、私  
は息苦しい気持ちを押さえ込みながら、パズルのピースを探してい  
くように荷物の中に手を入れていく。

ああ。

何が好きでこんなことをしなきゃいけない？

壁にもたれ掛かりながら考える。

そりゃ大学行く為だけだ。

いつの間にやら虫はどこか飛んで行つてしまつて、だったら私も、  
と思つて手のひらを大きく床についたら、床は思ったよりも滑つて、  
鈍い音と共に視界がおかしく変わってしまった。

頬を冷たい床につけて、誰にも見られていないのに顔を指先で覆う。  
恥ずかしい、そんなわけではない、やっぱり、恥ずかしい。

いや、多分今の状態を見ているのは虫だけだよ、なんて言葉で自分を励ます。

指の隙間からさびれた空間を覗く。

つまらない日常が大好き。だって何も変化しないんだもの。

友達も、両親も、同じことを繰り返していれば、それで、いい。

誕生日も来なくていい。誕生日ケーキを汚くしてしまうくらいでもいい。

今日と全く同じことが明日来ればいい。

ニユースも今日と同じ事を繰り返していればいい。

なんで進もうとするの？私はこのままでいい。

そんなに急いで、霧の奥へいり込んで行って、昨日の思い出を美化するのはとても楽しい？

何も変化しなくていい。つまらなくて、充分。

人差し指をそつと動かした。見える物が黒く沈んでいった。

そうだ。

大事な事を思い出した。

礼儀、隣の住人に挨拶をする。

灰色のバッグの中には綺麗に包まれたお菓子が一箱だけ入っていた。

ここのアパートは二階建ての合計四部屋だったが、天井から足音が聞こえることはなかった。

大家さんは、この四部屋の中でたった一人、住んでいる若者がいるがいいかね、と言った。

もちろん、いや、むしろ、いないほうが嫌。

そうか、それならいいが。

大家さんは付け加えた。

なぜこのアパートに一人しかいないのか分かるかい？

知りません。

大家さんは困ったように、  
あまり言いたくないんだが、五月蠅いから、なんだよ。

「ああ。」

ため息の代わりに情けない声が出てしまった。

その五月蠅い人に、お菓子を渡さなければいけないのか。

話を聞いたとき、辞めようかと思っていたけれど、私はこの家賃に相当ほれ込んでいたし、

それに、ほら、私は何時間かここにいるが、壁の奥からは何も聞こえてこない。

なんだ、きつと隣の人も大家さんに言われて丸くなったのね。

私はのっそり起き上がった。

だったら大量のダンボール箱が来る前にさっさと渡してしまいたいように。

灰色のバッグへと手を伸ばした。

変化しなくていいのに、どうしてそんなに私を前へと押すの？

淡い橙色に包まれた一つの箱を手を持つ。

これから、嫌なことがたくさんあるかもしれないのに、それでも面白がるつもり？

こうやって、思い入れのない場所へ来てしまった。

目標。現状。維持。

私は銀色のドアノブを触った。ぼやけた冷たさがゆっくりと皮膚に染み込んでいった。



## 男の正体

私は古ぼけたドアを叩いていた。

「すみません、いますか？」

返事がない。

「すみません、……すみません！」

このドアの横にはベルが無かった。

本来ならあるはずなのに、私のところにはちゃんと設置されていたはずなのに。

「まったく、いないのかよ……」

人差し指に痛みを覚えながら、私はドアから一步下がった。

背後で大きな風のうなり声が聞こえた。

首を少し動かし、一面に広がる建物たちの間に大きな隙間があるのを見つけてそこに目をやった。

日は少しずつ落ち始めてきていた。

前よりも少し時間が違う、私はそのことを思うと悲しくなった。

身に覚えのある風が髪の間を結っていくのを感じ取れば、近くにあるのであるう、木々がぶっそうな乾いた音を立てた。カラスの鳴き声を聞きながら、それは不定期に続く。

いないのだったら、また後でくればいい。

そんな考えがよぎる。

そうだ、私はこのアパート近辺の様子を思い出した。

どうせ外へ出てきたことだし、近くにコンビニはないだろうか。

ダンボール箱に包囲されてしまったのであれば、とてもじゃないが晩飯を作ることは出来ない。そうしよう、面倒だし、買ってきて簡単に済ませよう。

私が夕焼けの空に浮かぶカラスの姿を確認したとき、背後で鍵の空く音がした。

最後にノックをした時から随分と時間が経っていた。

「あ」

私はその方向へと体勢を変えた。

ドアに体半分を隠してそこに住む住人が顔を見せていた。

「ごめんなさい、・・・何か？」

寝起きの低い声が私を驚かせた。

男だった。随分と綺麗なツヤを持った黒髪を持っていた。

切れ味のある二重の下には黒ずんだクマがあった。

よれよれの黄色の टीーシャツを着て、中心には可愛らしい兎の顔がプリントされていた。

男は私の顔を見ると眉をひそめた。私は慌てて、

「すみません、今日から隣に住む者です、名前は、」

私の名前を続けさせようとした。しかし男は面倒臭そうに、

「いいよ、言わなくて。どうせ言ったって何にもならないだろ」

予想外の返答に焦る。

「そ、そうですか？・・・せめて名前ぐらいは」

「あーあ、いい、いい。知らなかったって別にどうってことないし」

「そうは言ったって・・・」

「代わりに俺も言わない。それでいいでしょ」

こんなこと言う人、初めて聞いた。

間違はなく私はこの男に戸惑っていた。

いや、誰でも戸惑うであろう、なぜならこんな先制パンチ、まずやられたことがない。

私はそつと目を横にずらした。

男はわかりきっているように、

「表札なんてないぞ」

と言った。

心の中は筒抜けだった。

「え、あ、それじゃあ」

これお菓子です、食べてください、美味しいですよ。

私は男に箱を差し出した。男は片手でそれを受け取る。

「それじゃあ、私帰ります、それじゃあ」

男が声を張り上げた。

「あ、ちよつと待て」

もうかかわりたくなかった。こんな攻撃を食らってしまつては、どうすることも出来ない。

ありえない、もうちよつと常識はないの？そりゃ知つたつて仕方ないけれど。

「なんですか」

私は男の顔を睨みつけた。

「怖い顔なんてしないでいいから。あのさあ、ちよつと手伝つてくれない？」

「はあ？」

「いやいや、今内職してるんだけどさ、どうも明日までに間に合わない。3日ぶつ通しでやつてたらさ、いつの間にか寝てて。このままじゃばいんだ。ね、だから」

「他の人に手伝えさせればいいじゃないですか」

「そんなこと言つたつて、このアパートには俺とお前しか住んでないんだよ。わざわざ友達の家まで行くのも面倒だし。まあそりゃ初めて会つた男にこんなこと言われるのは抵抗があるだろう。そうだ、半分渡すからお前の部屋でやつてもいい。それでどうだ」

「無理です。これから引越しの荷物がたくさん届くんですから」

「無理じゃない。あのさあ、人間サンは未知なる能力を持ってるんだよ。どうにかなる」

「話が少しずれているようです」

「よし！それじゃあここは兄貴の権力を使おう。ウチの三兄弟のうちの一人は小説家なんだが、それが結構メディアに露出してんのよ。だから顔の幅が多い。お前の好きな芸能人つて誰だ？会わせてやろう、どうだ」

「いや・・・」

「好きな芸能人いないの？まあなー大学生？そう、大学生か。うーん、その歳になるとなー、何が好きなんだ？イケメン俳優？イケメンお笑い芸人？」

「違います。」

「じゃあいるんだ。お兄さんに教えてみよう」

「これを言ったら私生きていけなくなります」

「そんな酷いもんなの？俺ね、結構テレビ好きだからマイナーなところまで知ってるぞ。・・・お前さ、俺をそんな喋らせて楽しいか？面倒くさそうな表情してるし、もう手伝っちゃえよ。今ならどんぐりガム付きだぞ」

断れない。断ったら、またこの話が續くんだ。

「ちよつとだけなら、いいですけど・・・」

「おうし、きた。じゃあ家に上がってよ」

「持ってきてくれないんですか？」

「ちよつとー少しは俺をいたわりなよ。さっきも言っただろ？3日ぶつ通しだって。どんぐりガムつけるんだからそれぐらいのサービースお返しは・・・。そんじゃバイト料もつけたしといてあげるよ。結構な額になりそうだし。」

「もう何でもいいです。さつさと私を上がらせてください」

「何だよ、怖いなあ。・・・素直になりなさいよー」

男はドアを全開に開いて、私を部屋の中へ案内した。私はその中へと入っていった。

その光景に、私は愕然とした。

部屋にはプリント、複数の字で書かれたノートが無数に転がっていた。床の色も見えない。

その中央にみかん箱があつた。上には綺麗な文字で書かれたレポート用紙がのつていた。

「俺さあ、なんでも屋をやってたんだよ。そしたら見事に依頼が殺到。今は留年寸前の大学生から、たまりに溜まったレポートを完成させ

てくれっていうのと、近所の高校生からの依頼でノート写し、それに春休みの宿題になったプリントをやってくれて。君にはプリントとノート写しをやっていたきたい。有名な進学校だから半端ない量だし、俺にも解けない。レポートは中身は薄いから大丈夫。兄貴の力もかりればどうにかなるはずだったんだけど、量をなめすぎていた。あいつは完璧留年だね。しかもあきらかにレポートじゃないような奴が入っているんだ。じゃあ今からダンボールにつめてあげるから、」

「なんでも屋つて？」

「おい、俺が説明しているのを無視してその質問かい。・・・まあ要するにお金が欲しかったわけだよ。だけどさ、あんまりやりたいバイトも無いし、それにいちいち上の人間の言葉を聞くのも面倒臭い。だからだ、俺は自分でこの仕事を始めたのさ。少々値は高いがとりあえずはなんでもやる。そしたらもう引つ張りだこ。忙しいけどお金はがつぱり。でもよく考えたら忙しいからお金使えないんだよな」。もともと貧乏症だから通帳の残金見るのも恐ろしくて今は寄付にまわってる。だったらもうやめればいいじゃんって言っても一つの趣味みたいになってるしな！」

「へえ・・・」

「反応薄いな、もうちょっと何か言つてよ。まあ時間も無いしな、期限は明日の朝七時までだ。依頼者の高校生は明日が学校始まりなんだって。どうにかして渡さないと。」

「どれだけの量ですか？」

「うーんと、数学のプリント三十枚と美術の絵描きと音楽のベートベンを聞いた上での感想、国語は読書感想文、それはなんとなくの兄貴が書いた小説を読んで感想を書くんだって。だから兄貴に直接聞いて書いて書いて書いた。あとは理科、社会のワーク。社会は日本史だけ進めておいた。だって俺日本史大好きだから。理科は化学式がよく分からんから手つけてない。・・・どうにかなるでしょ？」

「いや、ならない！今はもう日が落ち始めているんですから！」

「大丈夫！元気があればなんでも出来る。力道山のあの勇姿を思い出せ。」

「いや、それは力道山じゃなくて、」

「お前、俺を誰だと思っている？大のプロレス好きなんだぞ？まあ笑い限定だが・・・いけねえ、こんな場合じゃなかった。俺はいつも喋りすぎるんだ、じゃあよろしく頼むよ」

男はダンボール一箱を渡した。その重さに拍子抜けになった。

「じゃあ六時半になったら迎えに行く。そしたら依頼者の家まで行くぞ」

随分と無茶苦茶な男だった。だが実際の中身はもつと少なく、美術の絵描きと理科と社会の薄っぺらいワーク、それにもう終わっていた読書感想文だけであった。荷物はまだ届いていなかった。

私はさつさとそれを終わらせると、ひたすら段ボール箱を待ち続けた。しかし、あちらの手違いなのか、それは今日中に届くことは無かった。男の言うとおりの内容でもよかったかもしれないと、私はいらぬ手直しを美術の作品に施しながら、余った時間を過ごした。男は翌日、約束の時間にベルを鳴らした。私は男の運転するオレンジの軽自動車に乗って、依頼者の元へと向かった。男は途中で車をわき道に止めた。

「ばれるとやばいからね、親御さんに」

男は荷物を持って走っていた。私は車内に一人取り残された。

しばらくすると、男がゆっくりと歩いて帰ってきた。

手には茶封筒がしっかりと握られていた。

「ポストに入れておいた。それで帰ろうと道を一本曲がったら、依頼者がやってきてね。ありがとうございます、これを、って言って」男は運転席に乗り込むと、私にその封筒を渡してくれた。

「本当は駄目なだけだね、こんなこと。引き受けた後気付いた。それはちゃんとあの高校生にも言つといたよ。そしたら分かってくれたらしくて、これからは自分で頑張りますって。大学の奴らにも

言わなきゃなあ」

男は空笑いをしたあと、

「それ全部やるよ」

私は封筒の中身をそつと見た。

そこには二千円札が入っていた。

「高校生だからそれぐらいしかないんですよ。でも珍しいよ、今時。家宝だな、そりゃ」

二千円札一枚で、私は目を丸くした。

「あと、これから君は俺のパートナーとなり、なんでも屋を手伝ってもらいます」

「はあ？」

「いいじゃないか、まだ沢山残ってたよ。お爺さんの庭掃除、小学校の便所掃除、それに出張でママさんバレーのお相手もある。報酬は人それぞれ。感謝の心であつたりとか、チロルチョコであつたりとか。それに、お前なら都合がいい。もしも人を殺して片方が捕まっても、必ず相手の名前は言えない」

心臓を金槌で叩かれたような衝撃が走った。

男は私の表情を見ると笑って、

「嘘、嘘。そんなことは絶対しない」

手を横に振る。

いつか私は男を狐として見ることもあるのだろうか、そんなことがあつてはならない、こんな男に人生を振り回されるなんて。

だけど、暇つぶしくらいにはなるのだろうか。

私は妙な変化に胸をときどきさせ、興味を示していた。

## ある思い出

私の一日は電話の着信音で起きることから始まる。

相手はいつも隣に住む男であった。

「やあ、おはようございます。早速だけれど、俺は今から献血に行かなければいけない」

「そんな依頼が入ったの？」

「いや、CMでやっていたから。時にはボランティアも大切なのさ。そんなわけで、今日もよろしく」

私は大学に行く仕度をする、男の部屋を訪ねた。吊るされた硬い紐を動かせば、バケツが音を出す。男はすでに出てしまったようだ。私は男から貰った鍵を取り出すと、鍵穴に差し込み、そのまま手首を右に回した。

中は日によって表情を変えていて、ある日は大量の服が置かれていたり（それは女性の方からの、溜まった服にアイロンをかけて欲しいという依頼だった）、ある日は可愛らしいお弁当が作られていたり（緊急で早く仕事場に行かなければいけないという母親からの依頼で、子供の三人分のお弁当を作っておいて欲しいというもの）していた。

私は講義の時間まで設置されている黒電話の前に座った。電話が来るまでは、みかん箱の上で別の依頼物をしていた。

この依頼は小学校の先生からで、テストの点数を付けておいて欲しい、というものであった。私は赤ペンを握りながらテスト用紙をめくっていく。多分このテストは一年生がやったものであろう、まだ上手く書けない字を一生懸命に紙の上に広げている。今の私には考えられないような間違いをしている、そう思うと、ああ私は歳を取ったな、なんて考えてしまう。

黒電話の音が部屋に鳴り響く。



私は空いているもう一つの手を使って、受話器を取り上げた。

最初の決まり文句はもちろん、

「はいこちらなんでも屋でございます」。

「あの、急な事なんですが、依頼出来ますかね？」

私は赤ペンを置き、バッグの中から携帯電話を取る。

時刻は九時半。相手に言っていることが伝わるよう、はきはきと。男に教えてもらったことを実践する。

「はい、今日は二時までなら依頼を受け付けております」

「あのー、十時から始まるスーパーの特売で卵を買っておいて貰いたいんですけれど・・・」

どんな依頼でも受け付ける。なぜならなんでも屋だから。

「はい、分かりました。個数と、それに住所も教えていただけますかね？」

「えつと、三個と、あと住所は」

私は黒電話の横に置かれていたメモ用紙に住所を記録する。

電話を切ると、私は早速この部屋を出た。ちゃんと、二つの鍵を持って。

近くにとめてあった男の自転車に乗ると、私はスーパーへ向けて一気にペダルを踏み始める。

最初は大きな仕事も来るのかな、なんて外国の映画を思い浮かべながらそんなことを考えていたけれど、実際は雑用にも近いことばかり。

小さな小川を横目に私は自転車を走らせる。

この仕事を始めて一ヶ月。一番大変だったことといえば家出した小学生の女の子を探すこと。

写真に写ったその小学生は背伸びをしていて、茶色の髪に短いスカートをはいていた。依頼者の両親から一枚のノートの切れはしを渡された。そこには紫のペンで、

「毎日が楽しくない。きいはこの家を出ます。」

きい、とはこの小学生の名前だった。

きいちゃんも母親の財布から通帳を持ち出し、両親の今まで貯めていたお金をすべて取り出していた。

「なかなかやりますね」

男はそんなことを言いながら驚いていた。私はぼんやりとした気を持ちながらその子の母親と一緒にひたすら探した。男は父親と一緒に行動をしていた。

やがて私の携帯に一通の着信が入った。男がここから二つ先の駅にて女の子を発見したということだった。彼女はたった一人でいて、お金は千円ちよつとしか使われていなかった。

私は母親に言った。

「この歳の子供は皆、そんな野心を持っています」

それでも母親は、きいちゃんと再会すると駅の真ん中にもかかわらず怒鳴り散らした。父親は黙ってその様子を冷酷な目で見続けた。

「あんなことをすると、そのうち子供引きこもりになっちゃうぞ」私の耳でそつと囁いたのは男であった。

今日一日を潰したこともあってか、報酬は二万円。

私は男と一緒に、そのお金を使って深夜のレストランで静かな食事を取った。

残りは分け合い、私は途中でコンビニに寄ってもらい、ポテトチップスを一袋買った。

スーパーの中は、人々の波がひたすら特売品に向かって打ち付けていた。

肩を右、左と上手く使いながら私は卵売り場へ直行する。卵は残り五個で、なんとか、といった形で私はそれを買うことが出来た。

メモしておいた住所はここから近い。卵を割らないようにと慎重に自転車を進める。

「昼頃に帰ってきますので玄関の前に置いてください。お金はポストの中に入れておきます。」

着いた所はマンションであつた。軽く十階はあるだろう。私は依頼者の部屋へ行くために、階段を上がつていった。

依頼者の玄関の前を買つてきた卵を置くと、すぐ傍には可愛らしいお年玉の袋があつた。ポストの中だと聞いたはずなのに、私はそれを手に取ると中身を確認した。

中には卵代と報酬の千円が入っていた。千円は四つに折られていたが、かなり急いでいたようで、夏目漱石の顔が歪んでいた。

さあ、私は今来た道に戻ろうとした。

こうしている今も誰かから依頼が来ているかもしれない。それに、テストの残りもある。

私は家出をしてしまったきいちゃんのことを思い出した。

つまらなくていいのに、どうして変化をしようとしてしまうの？

自ら見えない沼へ飛び込むなんて、とても出来ない。

それは、私が大人になつてしまったからなのだろうか。

安全で、それでいいのに。

## 猫と男と

少しくぼんでいるドアノブを握る。軽い。

一枚板を挟んで、奥から物音が聞こえる。

「早いね」

私は奴が部屋の中にいるものだと思って声をかけた。だが返事は無い。

でもあいつのことだから、しょうも無い根拠で私は続けた。

「あのさあ、なんでも屋つていう素直な名前はいいけどさ、せめてもうちよつとひねってくれないかなあ。今時ありえないじゃん。例えばよろず屋本舗とか、意味分らないけど、でもなんでも屋は嫌だよ、今日初めて気付いた。それでも気付くまでに期間があつたつていうことはやっぱり自分おかしいのかな、でもあんたもおかしいよね、いやいや、RPGのしすぎだらつてつつこんでみようぜ。よろず屋つて今時そんなものにしか出てこないネーミングだよ、ねえ、聞いてんの？いや、私にはわかつているさ、お前がどんなものなのか、必殺フライパン返しだ、きつと心の中では毎日三途の川をどうやって渡ろつか考えているでしょ。私は騙せないぞ、だつ」

「お前恥ずかしいな」

聞こえないはずの声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、そこには、奴。右手にはスーパーの袋を提げている。足元が裸足にサンダル、というものだったから、奴は一旦家へ帰つてきたのだ。そして鍵をかけずに出かけた。私はドアノブの感触、部屋から聞こえた物音から、奴が家にいるものだと思っていた。あれ、物音は？だけど、そんな疑問もぶつける余裕はなかった。私は鼻の奥がつん、となるのを感じながら、しどろもどろに、

「いや、全然恥ずかしいですが。・・・献血楽しかった？」

「いや、軽く貧血気味」

そう言つと奴は私を押しつけてドアを開けた。こいつ、ほうれん草

ぐらい食っていないのかよ、そんな言葉が脳裏をかすめた瞬間、私はいつもの（冷静沈着で頭のキレる）自分に戻っていることに気付いた。

咄嗟に出た一言。

「泥棒入ってるんじゃないの？」

やはり理想なんてこんなものだ。

目の前にいるたった一人の聞き手も無視をする。

やっちゃった、例えどんなに重要な場面であっても力んではいけない。

そうやって自分自身に対してお説教を試みようとしたとき、足元に柔らかな感触があるのに気付いた。それはゆっくりと私の足を撫でる。

えめらるどぐりーんの瞳を持った、白い猫であった。

しつかりと整えられた毛並みといい、この人懐っこさ。いいところのお嬢さん、かは分らないが、きっとそんな感じなんだろう。

「ミレトス、君は可哀想だね。相手は女の色気もない奴と野郎だ。

ご飯はキャットフードだよ、間違っても煮干、なんてものは買つてこないからな」

私が話しかけていたのは、この猫、ミレトスだった。

この子は奴が拾ってきたものだった。私はその容姿に騙されていたのだ、嗚呼。

「そんなわけで、ミレトスは会計役だ。君、そろばん二級を持つてるかい？」

「悪ふざけはやめましょう。それに、ミレトス？馬鹿みたい、なんだその名前」

「おいおい、ミレトスを罵倒しないでくれ。俺はこう見えて猫好きなのさ。ちなみに今から戦争やるから三人の中で一人誰か頂戴って言われたら、真っ先に俺が行く。ミレトスを行かせるわけには行か

ない」

部屋でこんな会話を続けていたら、いつの間にかお昼を過ぎていた。私はまだノルマを完全に終わらせていなかったし、今日はなかなか次の依頼が来ない。

「最初の何日間、なんだかすごく忙しかった、そう感じるのは俺にも分かる。でも皆新しい物好きで、ただですぐ飽きる。何年単位でその繰り返しさ。今俺たちは飽きる、という部分に来ているのだ。」男の腕の中でリラックスするミレトスが、それに同調するかのよう

に高い声で鳴いた。

「じゃあ今しかない、なんでも屋つていう名前をどうにかしようよ」  
「それには賛成できない。どうでもいいじゃないか、大切なのは心に中身。それにしても、本当に暇だな」

この男。暇だな、って、それはないだろう。今日だって授業があつたはずなのに、こいつは可愛い猫と隣部屋に住む（色気のない）女と戯れている。

「あんたさあ、」

「何？」

本当にいい加減なんだね。これは私の、あんたを見ていての感想。くだら生きるの楽しい？親とか、お兄さんとかに怒られないの？なんか小説とかで影響受けなかったの？いや、私は否定しないよ。その逆も。

「うーん。まあいい加減、だしねえ。別に怒られはしなかったけど。ただね、」

そのあとに続く言葉はぼやけ、私の頭を揺さぶった。

夕方、何事も無かったかのように私は部屋を出た。今日のノルマが達成したためだ。奴はミレトスにべったりで、つい先ほど、散歩に出かけてしまった。

自分の部屋の中に入る。隣の部屋と同じ作りなのに、中に入るもの

でだいぶ表情が違ってくる。ここ何日間で、部屋は一気に荷物に埋め尽くされた。頬にまとわり付くような重い空気を取り払おうと、私は窓を開けた。冷たい風が入ってくる。

きつと、重い空気を取り払いたいんじゃないんだ。髪の毛が風に踊らされて、くすぐったい。

妙に響くあの言葉、どうにもならないのにどうにかしようとしているんだ。

それは誰が聞いても何とも思わないものだろう。でも私には響いている。

変に、おかしく、離れない。気持ちが悪い。

「皆力入れて生きてるから、皆同じものしか見えない。俺は皆が見えないものを見るんだ。

分かるだろ？力みすぎなんだよ。流されて、時々おぼれそうになりながら、川底で空を仰ごうとしている蟹を見つけてやるんだ」

どこかからか、動物のような鳴き声がした。

## 夢の中

足元には一匹の猫、ミレトスがいた。

私ははつとした。目の前には男と女、さっきの場面がただ広がるばかりである。

いけない、いけない、すっかり昔の思い出に浸ってしまった。

「普通だったらくその男の言葉を理解した色気の無い女はなんでも屋を辞め、新しい道へと旅立っていった>で終わるはずだったのに」私は頭が悪い。奴の言葉は形にもならず今までずるずると引つ張つてきちゃったし、なんだか妙な雰囲気漂うこの1コマ。

私はもう一度起こっている状況を整理すると、

「一体何をしていたわけ？あんたには大体彼女がいるでしょ」  
悪い人なりの精一杯の言葉を発した。

本当に怒りたいときに名前も言えないなんて。

なんだかずっといいように振り回されて、お金だつて貰ってるし、それなのに一番大事な名前を知らないって、こういうことよ。

「いやいや、俺は喧嘩、説得、それ以外何もしてない。俺は彼女を一番大切にしますから。」

男はへらへらと笑うが、それで女の存在が消え去るわけでもない。

「じゃあその人は何なのよ!!」

と言つてはみたものの、よく考えればこの台詞、なんかおかしくないか？

そりや変なことばっかり考えちゃった私が悪いのだけれど、こいつのことはどうでもいいのだけれど、八つ当たり気味になっちゃったのはいいのだけれど、これじゃまるで彼女みたいじゃないか。いやいや、そんな気はまるで無いのだけれど。

「おいおいそんな声出しちゃミレトスがびっくりするぞ。俺はミレトスが一番大事なのだ。」

それにミレトスは反応した。尻尾を振りながら、ミレトスは男の元



へ駆けて行つたのだ。男はミレトスの脇の下に手をやると、大事そうに抱えた。

「ここに来るのは依頼者以外の何者でもありません。」

男は一度、栗色の髪のもった女性のほうを振り返った。女性は静かに頷く。

「朝っぱらから言いにくい話なんだけどな、」

男はミレトスとじゃれ合いながら話し出した。

この女性、リエさんっていうんだけどね。つい先月、夫さんと離婚したんですよ。それで色々疲れちゃって、この俺のところまで来て、「殺してください」だって。そりやなんでも屋だけどさ、俺たちがやるのは一般的に言う雑用、なんだよ。まあ見ず知らずの男に向かつてそんなことを言うリエさんはよっぽどだったと思うし、そりや今まで分かつていたことも分からなくなるよな。そんなわけでだ、俺は彼女を実に鬱陶しい、青い言葉で説得した。そしたらリエさん逆ギレ。流石の俺もびっくりしたよ、だってこんなにべっぴんさんなのに、あんなキレかた！いやあ本当に世の中は難しいねえ。んでこのままだとアパートが崩壊するって思ったし、めんどくさかったし、じゃあ出来るだけのお手伝いはしますよーってところでお前が来たのだ。

「リエさん本当に疲れちゃってるので早いうちに決着つけます。出発は夜の十一時。車は俺の兄貴が用意してくれるから。いや、兄貴に上手く嘘つけてよかったよ。こんなことやってるって知ったら大変なことになっちゃう。君も行くんだよ。リエさんの最後の姿見届けようぜ。あとミレトスも。」

男は一通り言い終わると、リエさんに向かって、「これでいいでしょ？」と微笑んだ。

「大丈夫！今はまだ朝です。あ、やりたいことは今のうちやつてね。もしかしたら一緒に死ぬことになるかもしれないから。まあそれはリエさん次第だけれど。・・・きつとこの世に存在する娯楽以上の娯楽があるに違いない、ミレトス、」

奴は自分の腕の中で目をつぶる猫に向かってそう言った。

えめらるどぐりーんの目を持った猫、ミレトスの心は奴にも分からない。

だけどミレトスは、確かに柔らかい声で鳴いた。

「あの、よろしくお願いします」

リエさんがそれに続くように言った。

繊細で、手荒く扱ったらつぶれてしまいそうな声だった。

私、頭が悪いんじゃない、ただおかしくなっちゃっただけかもしれない。

嫌だ、嫌だとたった一本のタコ糸を握りながら泣いている自分が奥底には確かに存在しているのに、それを言葉で表すことが出来ない。

「車は昼頃、来るんだ。俺とリエさんは買出しにいつてくるから、お前、兄貴を出迎えてくれ。」

もうどうにもできなかった。

## 溶けて、隠れて

それから、やっと街中の人々が起きだして行動を開始する頃、奴は自転車に女を乗せふらふらと出掛けていった。

「こんな朝早くから出かけても、どこも開いていないのにねえ」

残された私はミレトスの顎を中指で撫でながら、一枚のガラスと向き合っていた。

そのガラスには自分の姿が映ってはいたのだが、奥に広がる風景の中に殆どが溶け込んでいた。

「気持ち悪いねえ、ミレトス。お前と私、体の中に変なものが浮かんでる」

体の中には小さな庭があつた。手入れされていない草たちが無造作に私の背中をつつく。端に寄せられたいくつかの鉢には何も植えられていなくて、栄養も何も無くなった土が盛られているだけである。頭の方に目をやれば、そこには判透明な色気が感じられた。

この部屋には今、人の気配がまるで感じられない。確かに私はそこにいるのだけれど、すっかり溶け込んで、意識もそっちに持っていかれて、空中に浮かんでいるように不安定で、そんなことを思っていたらミレトスがにやあ、と鳴いて私の膝の上から逃げてしまった。ミレトスはキャットフードが大好きだから、それが置いてある台所に行ったのだらう。少なくとも、ミレトスは暇さえあればいつもそこにいる。お前は猫なんだからもう少し猫らしい行動をしなさい、とも思ってみたけれど、ミレトスにはそんな気はさらさら無いようだ。

さて、私は部屋を中心に掛かっている時計を見た。

今はまだ朝の時間帯である。だけど私にはもう夕方、夜のような気がしてたまらなかった。

ついさっきの出来事が濃密すぎて、まるで夢のようで、体も心も疲れ切っていた。

疲れ切っていた？ただ単に見届けをするだけなのに？

お前はだからダメなんだ、当たり前のことなのにくよくよしやがって。あの女には来るべき時が早く来ただけなんだ。

そりゃあ、文章として起こせばそんなものだけれど、表された文字がすべてってわけじゃない。

.....

なんだか私、本当におかしくなっちゃったみたい。

お昼までにはまだ時間があるもの、何かしようかな。

私が小さい頃は、もし地球が減びるとしたら、何をやるって質問、必ず最後に出てくるのは、「お金をたくさん使う」。

.....

そんなわけで私は早速コンビニへと向かった。

買ったものは100円の紙パックに入った紅茶。

大学生だもの、そんな言い訳をしながら私は別の道を歩いていった。だって大学生だもの、勉強をしなくちゃいけない。持つものは持ってきたし。

こうやってアパートへ戻らなければ、きっと普通の日常、暇な時間を使って依頼人からのノルマをやったり、ミレトスと遊んだり、そんなことが流れるように過ぎていくだろうと思っていた。

お昼を過ぎた辺り、男の兄貴から電話が掛かってきた。

## 兄貴が言うには

「なんていうか、貴方も貴方ですねえ。アパート行ったら誰もいない、そういうことですか」

あいつの兄貴の声はどこか人を見下してるような、そんな声であった。

小説家をやっているというから、やはりそれに似合った性格なのだろう。私はこの人物にこれから会うことを考えるとすっかり頭が痛くなった。

何か無いものと薄手のジャケットに付いているポケットを探る。次の瞬間にはもう、私の手には一つの飴玉が張り付いていた。これはさっき友人から貰ったもので、暗くなる頃にでも舐めようと思っていた。

私はその飴玉を口に含むと、その勢いに任せて立ち上がった。そうして歩きながら兄貴に一言、平謝りをした。

兄貴は言った。

「僕は桃の味のアメが好きなんですけどね」  
しまった、と思った。

アパートの影よりも先に、その派手な赤い車が目に付いた。その横には黒のジャケットの中にストライプのシャツを着て、ジーパン、赤のスニーカーという出で立ちの男がいた。

男は私の姿を確認したのか、「おお」と言いながら手を振った。これが兄貴なのだ。予想していたものよりも随分と若かった。歳はリエさんと同じくらいだろうか、女の私でさえもうらやむ様な、日差しを充分に受けて艶やかに光る黒髪を持っていた。

「どうもこんにちは。兄貴、です」

兄貴は笑いを浮かべながら挨拶をすると、すっと手を差し出した。

私がそれを握ろうとすると、「いやいや違う、アメだよ、飴」。

「ほら言ったじゃないですか。僕は桃の味の飴が好きだって。買ってきてくれなかったんですか？全くぼろぼろだなあ。約束破るわ飴舐めながら謝るわで、ちよつとくらい気をきかせてくれてもいいじゃないんですか」

そこまで私の思考回路は発達していないのだけれど、私はそう言い掛けるのを必死で抑えた。

「ちなみに、僕の書いているコラムを読んできました？あれ、ペンネームで書いてるんですからね、変な誤解はやめてくださいよ。僕の名前はグリーンテドン大沢じゃない。あんな名前、馬鹿みたいだからね。本名？ああ、僕はじゅんって言います。三つ点書いて、こうやってカタカナの九の字みたいに書いて、日。洵。弟くんは名前を言いたがらないみたいだけれど、それもご愛嬌ってことで許してくれないかな。まあ知ったところでどうにもならないっていうのは分かるけれど。僕のことは兄貴、兄貴さん、洵さん、なんでもよし。ただ呼びつけはダメよ。仮にも年上なんですから。」

彼はなかなか口が達者だ。それでも今日私が会ってきて、なおかつ印象に残った人物の中では一番話が分かる者なのかもしれない。

「それよりも、今日弟くんがやることを僕は知っている」

は？私は口をあぐり開けて、兄貴さんの方を見た。奴、兄貴さんには秘密にしているって言ったじゃないか？

「この僕を舐めちゃあいけないね。だって僕は貴方の携帯番号だって分かってるんですから。疑問に思わなかったんですか？僕は貴方とまるで面識がない、なのに携帯番号を知っている。おかしいでしょ、でもこれ僕だからね、まあ大体のことは手に取るように分かっています。一時期は日本だって手に入れられるんじゃないかって思ったけれど、それは流石に無理だったね。せめて一都六県一道ぐらいでしょ。まあ笑い話はそこら辺にしておいて、僕もかなり貴方たちのことが心配なんです。だから僕は貴方たちについて行こうと思う。それに弟くんは免許書さえ持っていないんだ。無免許ならま

だいいけれど、仮にあの女性に運転させて、そのまま車ごと海へばつちゃん、それじゃあ困るんですよ。貴方もぞつとするでしょ？僕だって嫌だし、それに一番おかしいのが今回の依頼内容だ。もともと弟クンのやることだからって僕は考えていたけれど、まさかそんなところにまでいってしまうのには流石にびつくりしたよ。だから僕は考えたんです。この車の為にも、僕は貴方達を守る。だってこの車、僕の少ないお給料でローン組んで買ったんですから。まだはらい終わってもいないし、それに今のコラム連載だって打ち切られそうなんだ。ただでさえ毎日貧しい思いをしているのに、その連載が無くなったらそれこそ僕のほうが海に沈むよ。だから何があっても大丈夫、この僕に任せなさい。貴方は安心して車に乗っていればいい。せいぜい夜のドライブを楽しみなさい。」

奴も奴で、この兄貴も兄貴だ。

私は兄貴さんの口にもうんざりしていたが、内心ほつとしていた。大丈夫、だって。

「とりあえず僕が今日の仕事内容知っている、というのは秘密にしておいてくださいね。僕もなかなか興味あるんです。弟クンやあの女性の行動が。それよりも弟クンは僕を乗せていってくれるかな、無理やりに車だけでも連れて行こうとしたらそれこそ僕のお友達を呼ばなくちゃ。」

やがて、遠くからふらふらと二人乗りの自転車が出てきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4773a/>

---

拝啓、日だまりの人々

2010年12月19日01時49分発行